

ろう学校における IT の活用について

都立葛飾ろう学校 教諭 伊藤 守

<http://www.katsushika-sd.metro.tokyo.jp/>

キーワード：情報保障，基礎学力，職業教育，校務支援，開かれた学校，情報モラル

本校は、「東京都聴覚障害教育推進構想」を受け、平成 13 年度をもって足立ろう学校と綾瀬ろう学校が閉校したのに伴い、平成 14 年 4 月に開設された「新世紀のニーズに応えるニュータイプのろう学校」である。

本校の主なパソコン等の設置状況は、教員用 95 台、生徒用 135 台、プロジェクタ 10 台、プラズマディスプレイパネル、テレビ会議システム等と校内アクセス用無線 LAN が整備されている。

開設 2 年目の平成 15 年度から聴覚障害教育における東京都の IT 推進校として指定を受け、「情報保障」「確かな基礎学力」「職業教育の充実」「校務支援」「開かれた学校を目指して」の 5 つの柱をたて実践に取り組んだ。

情報保障：「見える校内放送」システムの構築

耳からの情報を取得しにくい生徒への情報を保障するため、通常、音声により伝えられる校内放送や災害情報などを動画、静止画、テキストによって見えるようにするシステム＝「見える校内放送」を構築した。放送するのは始業・終業のお知らせ、行事予定、生徒の呼び出し、子供たちの活動や給食のメニューを紹介する「お昼の放送」、緊急放送などがある。緊急放送は、火災報知器と連動して自動的に放送される仕組みで、ほかの放送に割り込んでいつでも表示される。火災報知器が作動しなかった場合や、第 2 報として避難情報などを知らせたいときは、手動で送ることも可能。聴覚に障害がある子供の場合、校内放送を聞いて呼び出しに応じたり、始業のベルを聞いて教室に入るという、自ら情報を取得して活用することが難しい。生徒を呼び出すにも、教職員がその生徒のところに行って直接伝えるため、生徒は情報に対して受身になりがち。

「見える校内放送」の取り組みは、情報を視覚的に発信することで、子供たちが自分で情報を取捨選択し、自立した行動ができるようになることを目指している。「授業開始まであと 3 分」など、授業開始、終了を知らせる情報を廊下に表示するようにしたことで、教室移動が多い高等部の生徒たちの行動が変化し、生徒たちの時間に対する意識が高まった。(この件に関しては、毎日インタラクティブで紹介されました。右の写真 2 枚は毎日新聞社提供。<http://www.mainichi-msn.co.jp/shakai/edu/elearningschool/news/20051215org00m040088000c.html>)



確かな基礎学力

ろう学校においても基礎学力の問題は避けて通れない緊急の課題である。そのためには情報障害といわれる聴覚障害児に対して情報をきちんと伝える必要がある。そのために、デジタル教科書の活用、プレゼンテーションソフトによる教材作成と提示、生徒自身のインターネットなどを使った調べ学習、映像、画像教材の提示、児童・生徒の学習成果発表など、幼稚部から専攻科までの各学部で、IT の幅広い活用を行っており、小学部などでは、国立特殊教育総合研究所の長期研修生と「聴覚障害児の助詞習得を促す HTML 教材」について、共同で調査研究を進めている。

また、高等部では、普通科一年で情報 A を 2 単位、普通科二年で情報 C を 2 単位履修し、すべての生徒が卒業までに基礎的な力を身に付けられるよう指導しており、聴覚障害者を対象にした携帯電話の学習活用に関する研究にも取り組んでいる。

(「聴覚障害者を対象にした携帯電話の学習活用に関する研究～大学との共同研究の試み」 <http://www.normanet.ne.jp/~zenichro/joho/2005/14-4.pdf> 参照)



職業教育の充実

本校高等部には、生産システム類型（デザイン系・機械系・食物系）と情報ビジネス類型（情報系・商業系・アパレル系）があり、高等部を卒業するまでに、すべての生徒に、最低限の情報活用能力を身に付けさせるとともに、生徒の進路に応じた専門的学習の充実を図っている。



校務支援

個々の教職員が作成した多くのファイルやノウハウなどの資源を、ファイルサーバ上だけでなく、校内 Web メール、掲示板等を最大限に活用して、資源の共有化に取り組んでいる。

開かれた学校を目指して

インターネット常時接続環境を有効に活用し、全国のろう学校・筑波技術大学などとの共同研究を通じて学び合う共同体の構築に取り組んでいる。

以下、その具体例として、宮城県立ろう学校・大阪府立堺聾学校からの呼びかけに応じて参加した協同研究プロジェクト＝「聾学校間のインターネットを活用した共同実験による数学学習」（平成 16 年度 学校企画）について、東京で行われた CEC（コンピュータ教育開発センター）の成果発表会のレポートの中から紹介する。

聾学校の生徒は、聴覚的経験だけでなく一般的経験も不足しがちで、そのことが数学の学習活動においても様々な困難点として表れる。従って、聾学校の数学指導においては、生徒の具体的経験や操作的活動などを量的にも質的にも豊かにするような工夫と配慮が必要である。また、聾学校に在籍する生徒は年々減少傾向にあり学習集団が小規模化し固定化している。そのため、生徒の多様な考えやコミュニケーションを生かした学習活動を構成することが難しく学習活動に深まりが出ない。生徒の多様な考えを引き出し主体的なコミュニケーション活動を構成するような教材や指導法の検討が聾学校における重要な検討課題である。そこで、インターネットを活用した共同実験型学習がそれらの課題を解決する手段の 1 つになるのではないかと考え、本企画を提案した。 <http://www.cec.or.jp/e2a/e2a/16rePDF/C08.pdf> 参照



この他、全国の聾学校の先生などで構成するメーリングリストにも参加し、日常的に情報交換・意見交換を行っている。ここで紹介した共同学習・携帯電話の学習活用に関する共同研究などの他、「見える校内放送」についても効果的で安定したシステムを構築できたのは、こうした情報交換の場があるからである。

「井戸端会議のメーリングリスト」参照（『聴覚障害』誌 2005 年 5 月号）

<http://www.normanet.ne.jp/~ww100114/library/li-47.htm>

情報モラル

情報モラルについては、教科情報の授業の中で行うだけでなく、生活指導部及び外部の関係諸機関と連携しながら、父母対象の研修会・セーフティ教室などを行っている。<http://www.tnet.metro.tokyo.jp/~T211/chukan/pta.htm>

残された課題

本校が開校して以来、IT推進校の指定期間を含めて様々な場面でのITの活用を推進してきたが、残された課題も多い。ここではスペースの関係から大きな項目のみあげておく。

- ・教材の共有財産化と著作権・肖像権。
- ・ネットワーク利用上のセキュリティ・情報モラル・携帯電話。
- ・環境の整備と維持管理の問題